

大学図書館とライティング・センターの連携

稲葉 直也（利用者支援課）

1. 日本国内外における大学図書館とライティング・センター連携の動向

(1) 日本国内の動向

ライティング指導の講習会実施やサポートデスク設置など、大学図書館内でライティング教育支援を実施する取り組みが報告されるようになって¹⁾いる。この流れは、大学図書館におけるラーニング・コモンズ整備の議論が盛んになってきたことと切り離せない。2010年12月に出版された文科省の『大学図書館の整備について（審議のまとめ）』では、大学図書館に求められる機能・役割としてラーニング・コモンズを挙げ、“このような「場」を利用して、学生がレポートや論文の書き方を実践的に学んだり、ライティングセンターの講義や演習を実施することも考えられる”²⁾と、図書館とライティング・センターの連携について触れている。こういった気運が高まる以前より図書館内にライティング・センターを設置している例もあるが³⁾、大学図書館がラーニング・コモンズ整備を試みる中で、新たな機能としてライティング教育支援を位置づけてライティング・センター設立を目指す動きが多い⁴⁾。

(2) 海外の動向

赤井規晃は、日本国内の現況について、“特に大きな影響を与えたのは、ラーニング・コモンズを受容する過程において、米国の大学図書館におけるライティング・センターの設置事例が紹介されたこと”と分析している¹⁾。北米大学図書館では、従来インフォメーション・コモンズと呼ばれる学習空間を提供してきたが、ここにライティング・センターをはじめとした他の学内学習支援部門の機能を集約させることで、ラーニング・コモンズという名称を与えるようになったという経緯がある⁵⁾。北米ではほとんどの大学図書館にライティング・センターが設置されており、重要性が高く認識されていることも報告されている⁶⁾。

2. 早稲田大学ライティング・センター

早稲田大学ライティング・センターは、当初は国際教養学部の学生支援のために2004年に設立されたが、大学全体でライティング教育が重視されるに伴い規模が拡充し、2008年より全学に開かれたライティング・センターとして確立された⁷⁾。国内において最も活発かつ充実した活動を展開している存在として知られており、図書館が運営には一切関わらず、独立した組織として運営されていることも特異点とされている⁴⁾。図書館とラーニング・コモンズ整備という文脈とは関わりなく、アカデミック・ライティングを支援する機関として早くより重要性が認識され、設立に至ったという点において、多くの日本国内の事例とは事情が異なっている。

3. 図書館とライティング・センターの連携意義

ライティング支援の体制が学内に十分に整っておらず、ラーニング・コモンズ整備にあたりその機能を一から設けようとする取り組みも多い中、早稲田大学には既に全国屈指のライティング・センターが存在しているという恵まれた環境にある。しかしながら、これまで早稲田大学において図書館とライティング・センターが連携する機会ほとんどない状態が続いていた。

レポートや論文執筆のプロセスでは、先行研究の調査、テーマの選択、調査領域の下調べ、アウトライン作成、本文の執筆と、学術情報の探索と実際の執筆作業を何度も行き来するが、図書館とライティング・センターはこの一連の各プロセスを直接的に支援できる数少ない機関である。図書館とライティング・センターが強い連携のもと、レポートや論文作成のプロセスに応じて情報探索支援とライティング支援を有機的に提供できるようになれば、その効果の大きさは計り知れない。

4. 図書館とライティング・センターの連携事例

このような問題意識の下、2013年度より図書館と

ライティング・センターの連携が本格的に模索され、連携した取り組みが行われるようになった。

(1) 所沢図書館における所沢分室の開室

ライティング・センターは、2013年5月に所沢キャンパスに所沢分室をオープンし、2014年春学期よりこれが所沢図書館内に移った。これを機に、所沢図書館とライティング・センターとの合同ワークショップが実施されるなど、単に場所としてだけではなく連携も図られるようになった。

(2) 合同ワークショップの実施

所沢図書館における連携を契機として、2014年秋学期より、早稲田キャンパスでも中央図書館とライティング・センターの合同ワークショップを開始した。ライティング・センターではライティング・ワークショップ、図書館では情報検索ワークショップが、各学期それぞれ日本語と英語で実施されている。そこで、これを合同開催とする枠を設け、レポートや論文を作成する時に必要な「文献を収集すること」と「実際に構成を決めて書くこと」等を共に学ぶことができるワークショップを実現した。今は日・英ともに学期に多くても1回の開催に留まっているが、すぐに予約満席となる人気の高さ、参加率の高さ、受講者からの高評価と、ライティングおよび図書館情報検索のワークショップへの要望の高さが強くうかがえる。

5. 今後のさらなる連携深化に向けて

筆者の希望や見込みも過分に含まれるが、今後の連携深化の方向性や可能性について述べたい。

(1) 授業における連携

ライティング・センターの運営母体であるグローバルエデュケーションセンターのアカデミック・ライティング・プログラムでは、「学術的文章の作成」をはじめとしたアカデミック・ライティング関連科目を提供している。一方、図書館も年間約250回の図書館情報リテラシーに関する個別授業支援を実施している。これまでは双方の機関を紹介し利用を推奨し合う程度に留まっていたが、例えば、アカデミック・ライティング科目で図書館資料を利活用するような場面があれば、必要に応じて図書館職員が支援を行う、または図書館が担当する基礎演習等の科目で「学術的文章の作成」の受講を前提とした課題設

定を行うなど、授業における連携強化も考えられる。

(2) レフェラルサービスの伸展

双方のサービスを有機的に行き来して利用できるよう、レフェラルサービスをさらに進展させていきたい。大学を挙げてラーニング・コモンズ整備が進められる中、両機関のライティング支援・情報探索支援サービスがラーニング・コモンズ各所で受けられるようになることが期待されている。残念ながら、すぐに双方のサービス出張所を各所に設けることは現実的ではないため、どのラーニング・コモンズの利用者であっても、必要とするサービスに案内・接続されるような体制を作らなければならない。まずは図書館とライティング・センター間のサービス同士の連携強化から進め、将来的には各ラーニング・コモンズに配備されるラーニング・アシスタントと連携を図り、双方のサービスが各々の箱を超えてキャンパス全体に行き届くような姿を目指したい。

謝 辞

本稿執筆にあたり、早稲田大学ライティング・センターの先生方より貴重なご助言を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。

注・参考文献

- 1) 赤井規晃. 大学図書館とライティング教育支援. カレントアウェアネス. 2011, no. 310, p.2-4. <http://current.ndl.go.jp/ca1756>, (参照 2016-07-13).
- 2) 文部科学省科学技術・学術審議会 学術分科会 研究環境基盤部会 学術情報基盤作業部会. 大学図書館の整備について(審議のまとめ) —変革する大学にあつて求められる大学図書館像— http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/1301602.htm (参照 2016-07-13)
- 3) 金沢工業大学ライブラリーセンターのライティングセンターが知られる。藤島秀隆 [他]. K. I. T. ライティングセンターの活動と現状報告. KIT progress. 2004, no. 9, p. 1-35.
- 4) 一例として、以下の論文で紹介されている国際基督教大学図書館の事例が挙げられる。畠山珠美. ライティング・センター：構想から実現へ. 情報の科学と技術. 2011, vol.61, no.12, p.483-488.
- 5) ドナルド・ビーグル. ラーニングコモンズの歴史的な文脈. 三根慎二訳. 2008, 名古屋大学附属図書館研究年報, no.7, p.25-34.
- 6) 例えば、私立大学図書館協会の2010年度認定海外研修「米国大学図書館におけるライティング・センターの役割について」の報告書がある。<http://www.jaspul.org/ind/committee/kokusai/kaigaikensyu.html> (参照 2016-07-13)
- 7) 佐渡島紗織, 太田裕子編. 文章チュータリングの理念と実践. ひつじ書房, 2013, 277p.